

# 國學院大學學術情報リポジトリ

三宅島における神教歌：  
葬送文化から祭礼文化への変遷に注目して

|       |                                                                                                        |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2025-04-09<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 高田, 彩<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/0002001569">https://doi.org/10.57529/0002001569</a>                  |

## 三宅島における神教歌 — 葬送文化から祭礼文化への変遷に注目して —

高田 彩

### はじめに

三宅島をはじめとする伊豆諸島には、故人を弔うために歌唱される和讃や念仏などが数多く伝承されている。このような和讃や念仏は、宗教者ではない一般の人びとによって実践され、継承される。本稿では、三宅島神着に伝わっている故人や祖霊を追悼するための歌である神教歌を事例として、特に実態を把握することで、どのような担い手によって神教歌が実践され、その実践や解釈がどのように変化していったのかを検討する。そして、今生きられる神教歌の諸相を明らかにすることを通して、葬送文化の変容という問題を照射することを試みたい。

### 1. 先行研究の整理と本研究の目的

#### 1-1. 神教歌と『神教歌譜』

三宅島における神教歌の変遷と意味づけの変化を論じる前に、まず神教歌の概要について確認する。神教歌とは、平田派国学者である権田直助が、明治14年（1881）に作成した鎮魂祭で用いる神歌のことを指す。また、その歌い方や神教歌を行う際の規則が記された著作を『神教歌譜』と呼ぶ〔星野2012〕。

『神教歌譜』の自序には、「此の書ハ、教会講社、其の他、老年の男女など、後生安楽を願ハむ為に、神を祭り、或ハ、喪家霊祭の席などに会集せる時に、うたふ歌の譜なり。抑歌をうたひて、神慮を慰め、幸福を祈り、靈魂を慰め、冥福を得しめむとする。必ず、其の法なくハ有るべからず」と記されている。また、『神教歌譜』では、演奏の様式と進行の説明がなされている。楽器としては、割筚、鞆鼓、笛の三つが必要であり、儀式では、歌長、鼓師、笛師、会長を定めることが明記されている。

これまで神教歌に関する研究は、主に『神教歌譜』に注目する視点から進められてきた。ヘルマン・ゴチェフスキは、『神教歌譜』を楽譜と捉え、その構成を分析している〔ゴチェフスキ2008〕。また、星野光樹は、葬儀式の成立と国学者の靈魂観を明らかにするために『神教歌譜』を検討している〔星野2012〕。このことから、『神教歌譜』に関する研究は、音楽研究や国学研究の立場から行われてきたことが指摘できる。

こうした視座から『神教歌譜』に関する研究が蓄積されてきた一方、神教歌がどのような担い手によって実践されてきたのか、その内実については不明な点が多い<sup>1</sup>。

#### 1-2. 三宅島における神教歌

神教歌の担い手や実践内容がわかる貴重な報告として、昭和58（1983）年に発行された『東京都民謡緊急調査報告島嶼編』がある。三宅村で調査を行った小島美子は、明治30年代から

大正時代生まれの18人に調査を行い、神教歌の内容について採録している。小島によると、神教歌は神着に伝わる祭礼歌であり、「後生安楽を願うために神祭喪家霊祭の席で歌う」ものだという。また、大勢でゆっくり静かに歌い、「リズムは大体規則的だが一部不規則」である。そして、太鼓が一つと笏拍子四つで構成されると報告されている [小島1983: 103]。

加えて小島は神教歌として、以下の五つの歌とその歌詞を記している。

表1 神教歌の種類と歌詞

| No. | 曲名        | 歌詞                                                                                          |
|-----|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1   | 戒歌（はらえうた） | そこきよみ 流るる川の さやかにも はらうる声を 神は聞こえなむ                                                            |
| 2   | 神歌（じんか）   | ひふみよ いむなや こともち ひふみよ いなむや こともち ひとふたみよいつむ<br>ななや ここのとお ももちよろず                                 |
| 3   | 祭歌（まつりうた） | 神祀る 宿に きょうさす 木神楽の としわにかくる やえのゆうしで やえのゆう<br>しで みてぐらは わがにはあらず あめにます とよおかびめの 宮のみてぐら 宮<br>のみてぐら |
| 4   | 願歌（ねがいうた） | さいともと 寝てもさめても 頼むかな おろかな身を 神にまかせて 神にまかせて<br>のちの世にも この世の神のしるべにて 愚かなる身の述ずもかな 述ずもかな             |
| 5   | 定歌（しずめうた） | のちの世も この世も神にまかすや おろかなる身の 頼みなるらん 頼みなるらん                                                      |

また、三宅村立図書館の郷土資料コーナーに配架されている、東京都民謡緊急調査の際に小島が記録した調査票のコピーには、三宅島における『神教歌譜』の伝播の経緯が記されている。

権田直助編述『神教歌譜全』（版権免許明治14年）

歌詞、旋律を示す音譜、楽器奏法の説明あり。明治37年に神着村（当地区）の火災でこの楽譜がなくなったので、「伊豆国田方郡西村の「萩原正平大人の嫡男同苗正君」にこれを借りて三宅島役所の早川教忠氏に依託して明治39年に謄写してもらった（閉じ括弧なし：原文ママ）」と記されている。

小島による三宅島の神教歌に関する記録と、権田直助の『神教歌譜』の内容を比較してみると、一部に相違点がみられる。例えば、小島は願歌の歌詞を「愚かなる身の述べずもかな」と記録しているが、権田直助の『神教歌譜』では、「愚かなる身の迷わずもかな」となっている。そのため、権田直助が記した『神教歌譜』と三宅島に伝わっている神教歌が同一のものであるかは定かではない。

次に、三宅島で社人と呼ばれる宗教者として神事の補佐役を担っていた佐藤源保が作成した『三宅島の神社』から、神教歌に関する記述を確認したい。佐藤によると、明治14（1881）年に神着村妙楽寺が廃寺とされ神葬祭となったが、翌明治15（1882）年に御蔵島へ養蚕の指導へ行った者が神教歌を覚えて三宅島に帰り、祖霊社の氏子を中心に数十名に伝授したという [佐藤1994: 113]。また、「神教歌は、神葬祭、祖霊社の春秋の大祭に斉唱し、故人、祖霊に対して追慕追悼の意を捧げて慰めるとともに、これによって一層祭祀の精神を生かすものと考えられている。また、この歌は、供物を棺前及び霊前へ献饌－玉串奉奠－供物撤饌の間を通して斉唱し、故人、祖霊が黄国で幸あれと祈りつつ終了する」という [同: 114]。

このことから、三宅島において神教歌は、神葬祭や祖霊社の大祭時に、故人や祖霊を追悼するために歌われる歌と考えられていたことが確認できる。

### 1-3. 三宅島における神教歌の実践

それでは、現在の三宅島において、神教歌がどのように実践されているのだろうか。現在、三宅島では、2月の初午の宵宮と7月の牛頭天王祭の宵宮の際に神教歌が歌われている。まず、初午の宵宮では、御笏神社の拝殿に安置されている獅子頭の前に、有志の女性たち5～6人ほどが集まって座り、「禊祓詞」を歌う。ここで歌唱される「禊祓詞」は、三宅島独自のものではなく、一般的に「天津祝詞」あるいは「禊祓詞」と呼ばれるものと同一である。一方で、この「禊祓詞」は、三宅島では「高天原」と呼ばれることもある。その際、30センチほどの笏を半分に切ったような形をした薄い板を二つ合わせて、正座した腿を叩きながらリズムをとり、そのリズムに合わせて歌う。

神教歌を歌う女性たちの後ろには、これから宵宮で獅子舞を舞う青年団のメンバーや獅子舞を観に来た地元の人びとが控えている。また、禊祓詞の歌詞が印刷されたカードが配布され、地元の人々も一緒に歌う。この禊祓詞を3回繰り返した後、神前に向かって一礼し、神教歌を歌っていたメンバーは退出する。それから宵宮の獅子舞が始まる。

一方、牛頭天王祭では、御笏神社から神輿が発進する前に、神教歌を歌う女性たち5～6人が集まって、禊祓詞を歌う<sup>2</sup>。このように、現在の三宅島において神教歌と呼ばれ、実践されているものは、禊祓詞であることが確認できる。また、初午と牛頭天王祭における神教歌の実践は、ともに青年団からの依頼を受けて行っているという。



写真1 初午宵宮での神教歌



写真2 初午宵宮の様子

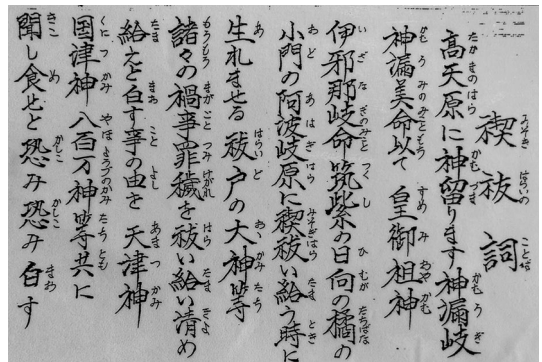


写真3 禊祓詞の歌詞カード

### 1-4. 研究の目的と方法

小島や佐藤の報告にみられるように、1980～1990年代における神教歌は、神葬祭や祖霊社の大祭時に、故人や祖霊を追悼するために歌われていた。一方で、現在の三宅島における神教歌は、祭の際に歌われる禊祓詞となっている。こうした実践内容の変化はいかにして生じたのであろうか。本稿では、三宅島における神教歌の実践内容の変遷を明らかにすることを



通して、葬送文化とその担い手の変化を捉えることを試みたい。

上記の目的を達成するために、本稿では令和6（2024）年2月9～17日と同年8月14～15日に三宅島にて行った現地調査で収集した文字資料や聞き取り調査で得たデータを中心的に用いる。特に、聞き取り調査に関しては、神教歌の実践内容の変遷を捉えるために、神教歌の活動を行っていた女性たちを中心に話をうかがった。また、聞き取りを行なった現80～90代の担い手には、自身の神教歌に関する経験に加え、彼女たちのおばあさん世代が行っていた活動の内容に関して見聞きしたことも語っていただいた。このような聞き取り調査で得たデータから、三宅島における神教歌の歴史的変遷を描くことを目指した。話者の一覧は以下の通りである。

表2 話者一覧

| 話者A  | 話者B  | 話者C  | 話者D  | 話者E  |
|------|------|------|------|------|
| 80代  | 70代  | 70代  | 90代  | 40代  |
| 島内出身 | 島内出身 | 島外出身 | 島内出身 | 島内出身 |

## 2. 神教歌の実践とその変遷

現在神教歌は有志で行われているが、以前は神教歌団という組織で活動をしていた。この神教歌団の結成と解散に至る経緯を明らかにすることを通して、三宅島における神教歌の実践の変容について検討を試みる。

### 2-1. 神教歌団の組織と運営

先述した通り、三宅島の神教歌は、明治15年に御蔵島から伝わってきたと言われている。御蔵島から伝わった神教歌を三宅島で最初に習ったのが、話者Aのおばあさんの世代であるという。話者Aによると、話者Aのおばあさんの世代は、「後釜ができなくて、後継者がいないため一度衰退した。それじゃあいけないというので、うちのおばあさんたちが今度は若い人たちに教えるようになった」そうだ。話者Aは自身が神教歌の活動をはじめた契機を以下のように語っている。

私なんかは、おばあさんが歳とってできなくなったから、おばあさんに（注：神教歌を）習って、「あんたもやれよ」と言われました。でも、私も勤めがあったりなんだから、すぐは出られなくて。でも、みんながやっていることは私もやりたかったから、途中で私も入れてもらった<sup>3</sup>。

以上のように、おばあさんが神教歌に行かなくなったら、次は娘や嫁などが行くようになるという。このようにして神教歌は三宅島で受け継がれてきた。また、話者Aが神教歌の活動に参加するようになった40～50年前にはすでに神教歌団という名前で活動していたそうだ。それ以前のことに 대해서는「よくわかっていない」という。その後、話者Aが神教歌団のリーダー的役割を担うようになってから、神教歌団の活動が体系化されていく。

話者Aが神教歌団に入った当時は、活動をするための資金がなかった。そのため、葬儀で拝んだときの御礼を活動費に充てていた。だが、それだけでは足りないもので、話者Aのポケットマネーで神教歌に必要な笏や譜面台などの備品を購入していたという。話者Aは当時役場

勤めをしていたため、神教歌の活動資金は「なんとかあった」そうだ。

また、話者Aが神教歌団に入る以前は、太鼓を叩く人が決まっていたが、話者Aは、「みんなが叩けるようになった方がいい」と思い、太鼓の役を「今日は誰、明日は誰」というふうに交代制にして練習したため、話者Aの世代はメンバー全員が太鼓を叩けるようになったという。

そのように活動を続けてきた一方、神教歌団に入っていて名簿に名前があっても、活動に参加する人は幾人もいなかったという。神教歌は「1人では拌み切れない」ので大勢の人がいるが、「名簿の半分も来ていなくて、終い頃は10人も来ていなかった」ため、「それで解散しようってことになった」。解散した時期は正確ではないが、平成20年頃に組織としての神教歌団は解散した。

上記のように、組織としては解散した神教歌団だが、その後は有志によって活動が続けられていた。それでは、神教歌団と有志はどのような実践を行っていたのだろうか。次節にてその具体的な内容を確認していく。

## 2-2. 活動記録からみる神教歌

本節では、神教歌に関する活動や実践内容の変遷を、神教歌団の活動記録と聞き取りの調査によるデータから追ってみたい。現在、神教歌団に関する活動記録は、平成7年度から平成20年度分までが残されている。具体的には、名簿、連絡網、会計報告、年中行事表などの事務的な書類が中心である。

まず、『神教歌団の年中行事』を確認してみよう。その内容を表にしたものが以下である。神教歌としては、1～10月の間に、祖霊社の小祭や大祭、先述した初午や牛頭天王祭、御笏神社の大祭の際に、「おはらい」や「拌み」を行っていることが確認できる。それ以外にも、「依頼されたときのみ」、通夜のおはらいや葬式の拌みを実施してきたようだ。

一方で、現在、神教歌が実践されるのは、初午と牛頭天王祭の2回となっている。それでは、いつまで祖霊社での大祭・小祭、通夜・葬儀での実践が行われていたのだろうか。神教歌団の会計報告書や決算報告書から確認してみよう。

『平成8年度神教歌団会計報告』には、神着青年団から合計5万円の謝礼が支払われていることが記載されている。また、支出の部をみると、年度費の項目に、香典として1万円支出した旨が記録されている。次に、平成20年3月31日作成の『平成19年度 三宅島神着『神教歌団』決算報告書』によると、収入の部、礼金の項目には、青年団から5万円の礼金が支払われた旨が記録されている。その内訳として、「青年団初午、御笏神社大祭、天王祭」と明記されている。また、祖霊社から6万円の礼金が支払われていることが記載されている。こちらの内訳としては、「大祭2回、小祭2回」とされている。加えて、外三件という記録があり、3名分の名前が記録されている。

このような神教歌団の活動記録から、平成19年度時点では御笏神社の大

表3 神教歌団の年中行事

|               |                            |
|---------------|----------------------------|
| 1月16日 午後1時頃   | 祖霊社小祭時のおはらい                |
| 2月 午後7時頃      | 初午講のおはらい                   |
| 3月21日 午後1時頃   | 祖霊社春の大祭時の拌み                |
| 7月中旬 午後7時30分頃 | 天王祭宵宮のおはらい                 |
| 8月16日 午後1時頃   | 祖霊社秋の大祭時の拌み                |
| 10月10日 午前10時  | 御笏神社大祭の拌み                  |
| その他           | 通夜のおはらい<br>葬式の拌み 依頼されたときのみ |

祭への参加、祖霊社の大祭・小祭への参列、通夜・葬儀への参列がなされていたことがうかがえる。

## 2-3. 通夜・葬儀での活動

上記の活動は、どのようにして行われていたのでしょうか。以下、神教歌団の関係者への聞き取り調査から、具体的な活動内容について描いていく。まず、現在行われていない、通夜・葬儀に関する活動から見ていこう。

話者Bによると、神着の神道の家に死者が出た場合、通夜は「呼ばれなくても構わず行く」という<sup>4</sup>。この通夜がはじまる前の時間に神教歌団が集まって、参列者が並んでいる前で、禊祓詞（高天原）を唱えるという。神教歌団が禊祓詞（高天原）を歌い終わった後に神職が到着し、通夜がはじまる。一方、葬儀に関しては、三宅島における葬儀の互助を行う組織であるシンルイから「神教歌お願いします」と頼まれたら参列するという<sup>5</sup>。

葬儀の際には、玉串奉奠をしている間に「そこきよみ」を歌う。「そこきよみ」の歌詞に注目すると、先述の『東京都民謡緊急調査報告島嶼編』に収録された、祓歌、神歌、祭歌、願歌、定歌の歌詞をつなげたものであることがわかる。また、「そこきよみ」を歌っている際も笏を半分に切ったような形をした薄い板を使用するが、禊祓詞（高天原）のときとは異なり、2つの板を合わせて鳴らすことで拍子を取る。加えて、1人は太鼓を叩くという。「そこきよみ」は、玉串奉奠が終わるまで続けられるので、参列者が多い場合は、何度も繰り返し歌うことになる。

このような葬儀での神教歌は、「家が狭いから神教歌はいいです」と断られることもあったという。別の家に拝みに行った際も、「座る暇もなく」拝んだ後、「もう終わっただろう。もういいだろう」と言われ、すぐに家の外に出されたこともあったという。

葬儀における拝みでこうしたことが続いたため、「私たちだけだとおばあさんだしなめられる」と考えた話者Aは、宮司に依頼して神教歌団の会長になってもらった。それからは、葬儀でのトラブルがなくなったという。

話者Aによると、話者Aが神教歌団のまとめ役をしていた期間には、「年に1、2回ほど葬式に行った」そうだ。また、葬儀に呼ばれた際は、



写真4 「そこきよみ」歌詞①



写真5 「そこきよみ」歌詞②

表4 通夜・葬儀の流れ

|         |                                                                                  |
|---------|----------------------------------------------------------------------------------|
| 通夜・葬儀の前 | シンルイから神教歌団に葬儀での拝みの依頼                                                             |
| 通夜      | 通夜は依頼の有無に関わらず香典を持参して参列<br>神職が到着する前におはらい（高天原）をする                                  |
| 葬儀      | シンルイから葬儀での拝みの依頼があれば参列<br>神職が神を上げた後拝む。玉串奉奠 の間は拝み続ける<br>太鼓一人、他の人たちは笏を合わせて鳴らし、拍子を取る |

葬儀を出した家から神教歌団に2万円の報酬が支払われたという。

この報酬は、葬儀が終わって数日の内に支払われていたそうだ。また、葬儀に参列した際の報酬は原則2万円だったが、ときには1万円や5千円のこともあったという。このような葬儀の参列に対する報酬は、神教歌団の活動資金として管理されていた。また、神教歌団での通夜・葬儀への参列は10年以上行われていないそうだ。

ここで、話者A、Bの語りの内容を整理して、通夜・葬儀での神教歌の流れについて確認したい。通夜・葬儀の神教歌の流れを記したものが表4である。

通夜で唱えられる禊祓詞（高天原）はおはらい、葬儀で唱えられる「そこきよみ」は拝みと呼ばれ内容も名称も区別されているが、それに加えて、おはらいの場合は玉串奉奠を行わず、拝みの場合は玉串奉奠を行うという差異もあるそうだ。

#### 2-4. 神教歌団の解散後の活動

現在の神教歌は、有志での活動に移行し、初午と牛頭天王祭で禊祓詞（高天原）を唱えるおはらいのみを行う活動に縮小している。現在の活動形式に移行する契機はどのようなものであったのだろうか。正式に神教歌団が解散した年度は不明だが、神教歌団の活動記録や聞き取りから、平成20年頃に解散したと推察される。

解散当時の神教歌団の状況について、話者Aの世代の次世代である話者Cは次のように語っている。「話者Aや他のメンバーから辞めると正式に宣言されたわけではないが、上の世代はやめることは相談していた。私たちが口出しできるような雰囲気ではなかった。それで本当になくなってしまって、どうする？ ってなって、3～4人で練習していた」<sup>6</sup>。

神教歌団の解散後、有志によって練習が続けられてきたが、その活動は以前と異なる内容になっていく。まず大きな変更点として、神教歌団を解散するときに、葬儀や大祭で歌われてきた「そこきよみ」をテープに録音したことが挙げられる。それ以降、葬儀や大祭で拝むときには、このテープが流されるようになったという。

このような「そこきよみ」の録音テープの使用には、「そこきよみ」の技術的な要素が関係している。神教歌団では、話者Aの方針で誰でも太鼓を叩けるように練習してきたが、これまで神教歌の練習に参加する機会が少なかった話者B、Cの世代は、太鼓を叩ける人がいなかった。そのため、太鼓が必要な「そこきよみ」を歌うことが困難になったことが推察される。

#### 3. 担い手にとっての神教歌

話者Aが中心的な役割を果たしていた神教歌団が解散した後も、話者Aたちの世代は、私的に拝みを行っていた。例えば、神教歌団のメンバーの父や夫が亡くなった際には、葬儀から数日後に神教歌団のメンバーが「拝ましてくれ」と頼んで、自主的に集まり、拝みを行っ



ていたという<sup>7</sup>。このように、神教歌団の解散後も、話者Aの世代は自主的に集まって、死者を弔っていたことが確認できる。

神教歌団の解散後は、話者B、Cの世代が有志で集まって初午や牛頭天王祭での活動が続けられていた。一方で、世代間による神教歌に関する解釈の違いが生じるようになってくる。

話者D「今はおはらいが神教歌になっている。おはらいって書いてあるのに神教歌と言っているのよ」

話者A「でもこの会そのものを神教歌団っていうから、その仲間だからそう思っているんだよ」

話者D「私の頭の中では、そう思っても、話者Aさんと相談しなきゃいけないと思った」

話者A「相談しなくても言ってよ。これは神教歌じゃなくて、おはらいっていうんだぞって」

話者D「私がそう思っても、違っているかもしれないからさ。これ2～3日前に考えたの。やったでしょ？ 宵宮で。だから言った方がいいのかなと思って」<sup>8</sup>

2024年2月に行われた初午の宵宮での神教歌の様子を報告する話者Dとそれを聞く話者Aのやり取りからは、昭和戦後期から平成初期に神教歌団で活動していた現80～90代の担い手にとって、現状の初午や牛頭天王祭で行っている神教歌は、神教歌ではなく、おはらいという認識があることがうかがえる。

また、現在の神教歌の担い手である話者Eは、初午や牛頭天王祭で行う神教歌について、「流れる的には、（注：神教歌が）ないと神事が滞りなく行えない。（注：神教歌が）先にあるって、御霊を入れないとお祭りがはじまらないって感じ」と語っている<sup>9</sup>。この語りからは、大祭や葬儀での故人や祖霊の冥福を祈る拝みの要素が薄れ、祭礼の際に行うおはらいの要素が強くなっていることがうかがえる。

#### 4. 分析

これまで神教歌の実践とその内容の変化、および、担い手による解釈の変化について論じてきた。神教歌の活動の変遷を時系列で整理すると以下ようになる（表5）。

表5 神教歌の活動の変遷

|            |                                                                                            |
|------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 明治～昭和戦後期   | 明治15年に御蔵島から神教歌が伝わる。<br>神葬祭、祖霊社の大祭に、故人・祖霊に対して追悼の意を捧げるために歌われる。                               |
| 昭和戦後期～平成初期 | 故人・祖霊に対して追悼の意を捧げるために歌われることに加え、初午や天王祭などの神事・祭の際にも歌われるようになる。                                  |
| 平成初期～平成後期  | 参加者の減少、モチベーションの低下などの要因から、神教歌団としての活動が段々困難に。組織としては一度解散し、有志で活動を継続。通夜・葬儀、祖霊社の大祭での活動の機会はほぼなくなる。 |
| 令和期        | 通夜・葬儀、祖霊社の大祭での活動の機会はなくなり、青年団から依頼を受けて初午と牛頭天王祭での活動のみを行うようになる。                                |

活動が停滞する時期をはさみながらも、明治期から令和の現在に至るまで三宅島では神教歌の実践が継続されてきた。御蔵島から神教歌が伝わってきた当初は、故人や祖霊に対して

追悼の意を捧げるために歌われていたが、徐々にその実践内容や意味づけが変容していくこととなる。

三宅島における神教歌の大きな特徴は、神着地区に伝わる葬儀の際の互助組織であるシンルイ制度と結びついていることである。葬儀に神教歌を呼ぶか呼ばないかという判断は、葬儀に関する一切を取り仕切るシンルイの判断に委ねられており、シンルイが依頼しなければ葬儀での拝みは行われない。また、家の大きさなどの環境的要因によっては神教歌を依頼しないという決定が下されることもある。このように、ときには葬儀を滞りなく進行したいシンルイとの間で意見の相違がみられることもあったが、問題が起きた場合、神教歌団では宮司を会長にするという対処法を用いることで自身の立場を保障してきた。こうした営みから神教歌団は自律性を持った組織であったことが認められる。

加えて、葬儀に呼ばれた際には葬儀を執行した家から神教歌団に報酬が支払われていたことも注目される。この報酬は、神教歌団にしかできない実践に対するものであり、故人を追悼するために神教歌が必要とされていたことの証左になるだろう。

しかしながら、神教歌の担い手の減少やそれに伴うモチベーションの低下などの内的要因によって、組織としての神教歌団は解散することとなる。その際に、葬儀や大祭で歌う「そこきよみ」をテープに録音したことで、以降の葬儀や大祭などで拝むときには、このテープが流されるようになり、「そこきよみ」を歌う必要がなくなった。

さらに、神教歌団の解散後は、有志での活動に移行していくが、有志の中には太鼓を叩けるメンバーがおらず、技術的な要因からも「そこきよみ」を歌うことが困難な状況であった。このように、テープへの録音や技術を継承することの難しさなどの複合的な要因から、拝みの際に歌われる「そこきよみ」の実践は行われなくなった。一方で、故人や祖霊を追悼するという神教歌の機能は残存しているといえよう。

### 神教歌（平成後期以前）

葬儀・大祭での実践あり



祭礼での実践あり



図1 神教歌の変遷①

### 神教歌（平成後期以降）

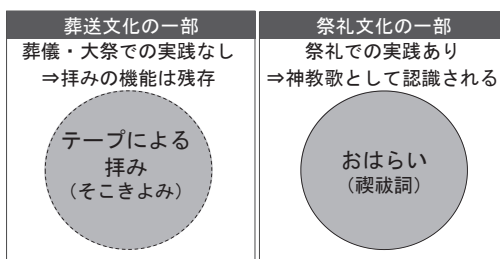


図2 神教歌の変遷②

以上の要因から、神教歌の拝みの実践は希薄になっていくが、初午や牛頭天王祭でのおはらいの実践は継続されていた。これまで三宅島における神教歌は、拝みとおはらいの2つの実践を通して継承されてきた。しかし、拝みの側面が希薄化し、神教歌の活動が初午と牛頭天王祭に集中したことで、おはらいの際に歌われる禊祓詞こそが神教歌であるという認識が作られた。

このことから、三宅島における神教歌は、故人・祖霊の追悼を目的とする葬送文化の一部から、祭礼文化の一部としての神教歌という解釈へ変化したことが指摘できる。現在の神教歌に関する認識は、神教歌の担い手のみならず、初午や牛頭天王祭などの祭礼を通して見学

